

# スピリチュアリズムに触れて思うこと

西嶋宏明

(広島県法華寺住職)

近藤千雄先生のお話を伺つたり、ご著書も読ませていただきましたが、びっくりしたり、愕然としたり、最後に感じたことは、一番靈魂の扱いに近い立場にある私が、その扱いが粗略であつたのではないか、儀礼的に走り過ぎていたのではないかということを感じ、大変反省をさせられた次第でございます。

先程の先生のお話の中では、靈体の知性というものがあるそうで、その図を見ましたが、立派な形をしておりますが、私の靈体は恐らくガタガタになっているのではないか、また、本体もずいぶんいびつではないかと思います。

至りませんので、ただいまからのパネルディスカッションの問題提起になるかどうかわかりませんし、既に皆さんのがご承知のことを反復的に申し上げるやもしれませんが、しばらくお聞きをいただきたいと思います。パネラーの先生方、どうぞよろしくお願ひいたします。

私は呉に住んでおります。呉は創価学会員の多いところでございます。選挙でも上位で当選しますが、近年、少しお様子が変わりまして、私どもの寺に、葬式だけをしてくれと言つてまいります。ところが、この間、私の町内のはずれに創価学会の支部長の家があり、そこでお年寄りが亡くなり葬儀がございました。看板に「友人葬」と書いてあります。お題目一辺倒で四、五十分、しかもマイクを使ってやります。私のところは高台にございますから、全部聞こ

えでます。驚きました。友人葬と言つて、坊さんは要らんという雰囲気でござります。

さて、昨今、僧侶無用論と申しますか、戒名も要らない、葬儀も要らない。先般『ノーサイド』という本を読みましたが、お骨も散骨で済ませてしまつ。それでいいのではないかということが出でております。その逆に、私のほうのお檀家で、私と同じ年配の方が、ことしは戦死者の五十九回忌で靖国神社へ行く。あそこには父親の御靈がある。どうしても参加するんだと、そういう見方の方もいらっしゃる。さまざまですが、今日、テレビなどマスメディアを拝見しておりますと、どうも靈魂に対する軽視と申しますか、不敬と申しますか、その最も原因となるのが、人間は死んだらおしまいだという考え方が流れております。特に若い者は、目に見えないものは信ずることができない、認めることができないという意見です。

これについて、近藤先生のご著書で、「心靈現象を研究する目的と意義についてエドワーズが述べていることを『まえがき』から引用しておく」として述べられている部分を抜粋したものを読ませていただきます。

「死後の存続」の事実を疑問の余地のないまでに証明することは、人類にとって計り知れない価値を有する。この地上生活がさらに一段上の明るい生活への準備段階<sup>ブレイブード</sup>であり、そこには本質的に今と変わらない個人としての生活があり、したがつてこの世での行ないがその位置づけをすることになるとの認識が得られれば、おのずとこれまでの生活規範に改革を迫られることになろう」(『人生は靈的巡礼の旅』近藤千雄著 ハート出版 八九頁)

いわゆる因果律、懺悔滅罪という意味合いのものではなかろうかと思ひます。さらに、

「本当の平和、眞の四海同胞は、人生の意義と目的とを説く確固たる知識に基盤を置く、強力な靈的勢力をバックにしたものでなくてはならない。(中略)一般の人々が死後存続の意義の重大性に目覚めれば、人類の文明はますます靈的価値を伴つたものとなり、社会的規範も、経済的觀念も、国家的慣習も、さらには国際的通念も大々的に再構築を迫られ、人間的努力は詮ずるところ、人類全体としての平和的で協調的な靈的進化のために為されるべきである

との理解に立つて、生活を発展させていくことになるに相違ない。言いかえれば、究極の目的は、世の中全体をスピリチュアライズ（靈的に淨化）することであらねばならないのである」（前掲書 同頁）

と、ご説明になつております。

さらに「心靈現象とは何か」の章の「計画性と秩序」の項で、

「人間本来の靈性に目覺めさせる——英語でいえばスピリチュアライズする——ことを目的として、地球規模の大靈團が組織され、地球神界からの指令によつて人間生活のあらゆる側面——宗教・科学・政治・医学等々——の淨化活動が推進されている、というふうに認識していただければよい」（前掲書 一〇八頁）

とあります。これは我々で申します仏性の開顯、仏種の自覺に近いことではなかろうかと拝察申し上げるわけでございます。

総じて、今日、我々宗門はお題目総弘通運動を推進いたしまして、信行会と銘打ちまして、未信徒を中心とした教化を展開しております。しかし、實際はなかなかそうもいつていないのでございます。未信徒の教化が今日大変大切なことではございますけれども、いま一つ本日私が申し上げたいことは、以前から私が思つていましたことですが、臨終のときの重要性が、ここにうたわれてこなければならぬのはなかろうか。特に通夜などは未信徒がたくさん集まつてまいります。そのときに、日蓮宗としてどのように死生觀を教化していくか。幸いに最近は通夜の席にはスピーカーがついております。大々的に声が通ります。

一般、私とほん年齢が同じ男性の方がなくなりました。この方とはよく団參に参りまして、ほんどの靈跡を参拝しました。葬儀に御子息が東京からはせ参じてまいりました。実に冷静な男で、「おやじは死んだか」というような顔をしておりました。通夜が終わりまして、棺を開けましたが、普通の姿をしておりましたので、「行衣があるはずだから持つてきなさい」と申しましたら、奥さんが探して行衣を持ってきました。私とたくさん団參をいたしました

から判がいっぱい押してあります。それを「子息が遺体にかけておりましたが、右の肩口に、そのご子息の名前が書いてあり、その下に「当」何とかと書いてあるのを発見します。

「お上人さん、これは何でしようか」

私が見ると、墨の色も薄らいでいましたが、その右には「家内安全 身体健全」と書いてある。それは私が書いたものです。その左に何か小さく書いてある。それは、「子息が東京で交通事故に遭って、片足がほとんどダメになりましたが、亡くなつた方が息子の名前を書き、その下に「当病平癒」と書いてあつたわけです。それを知つたご子息は、初めて涙を流したのであります。

私はそれを見て、親子の関係ではありますが、そこには大きな慈愛というものによって受けてこたえるものがあるのでなかろうかということを、通夜の席ではつきり感じた次第でございます。さらにもう直接死に携わりまして、死後の尽七日、年回、回向、供養、みずからの積功累徳によつて、靈山往詣の安心を与えて、現安後善のための大きな指針となるべく、悲しみを悲しみとして乗り越えてもらわなければならぬ。懺悔滅罪によつてみずから的心に目覚めさせ、新しい前向きの人生に転ずるチャンスが生まれてくるのも、やはりこういうときではなかろうかと考えましたときに、大変重要な問題であり、近藤先生がおつしやいましたスピリチュアライズされていっているのはなかろうかと感じるわけでございます。

宗祖は『生死一大事血脉鈔』におきまして、「夫生死一大事血脉者、所謂妙法蓮華經是也。其故は釈迦多寶二佛寶塔の中にして譲上行菩薩給、此妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已來寸時も不離血脉也。妙は死、法は生也。此生死の二法十界、當體也。」(定遺五三貞)と述べられております。そういうものを感じてきましたときに、宗祖の常に持つておられました法華經は、寿量品による久遠本仏の開顯することによって本眷属でありますところの御弟子も久遠であることを示し、宗祖の表明されました上行所伝のお題目の三業受持以外、眞の成仏はないんだと

いうこと、いわゆるこれは三種教相でございますが、そういうことを確信を持って我々は死に臨んで説いていかなければならぬのではなかろうか。そういうことを近藤先生のご著書を読みながら、我々僧侶として感じたわけでございます。

『生死一大事血脈鈔』には、さらに「今日蓮が弟子檀那等、南無妙法蓮華經と唱ん程の者は、（中略）過去に法華經の結縁強盛なる故に、現在に此經を受持す。未来に佛果を成就せん事不可有疑。<sup>ヒ</sup>過去の生死、現在の生死、未來の生死、三世の生死<sup>ヒ</sup>法華經を不離<sup>ルヲレレ</sup>切法華の血脈相承とは云<sup>フ</sup>也。」（定遺五二三頁）とあります。ここをもつて四海帰命、広宣流布の大願をかなえなければならないということにならうかと拝察するわけでございます。

我々は先ほど反省しましたように、布教師でありながら、どうも儀式的になり過ぎて、現世のことだけに目を向ける靈魂のことをなおざりにし、見過ごしていることが多いのではなかろうかということを感じた次第でございます。

近藤先生は、靈魂には死はなくて、死はさらなる次の生へのスタートであるということをおっしゃつておられます  
が、私どもはお通夜の棺の前で、「今身より仏身に至るまでよく持ちたてまつる、南無妙法蓮華經」と、はつきりと靈魂に伝えているわけでございます。靈魂の来世得作仏を願つて、最も靈魂に近いところにある私自身はもつと反省をして、スピリチュアライズしていくべく精進をしていかなければならぬのではなかろうかということを、先生のお話を通じて感じた次第でございます。

問題提起まではいっておりませんが、皆さんのご意見がありましたらどんどんお聞かせいただければ、布教師会としてもありがたいと思っております。どうぞよろしく。ご無礼しました。（拍手）

\*本稿は、平成六年二月一日、福山市良縁閣にて開催された第二十二回教化学研究集会にて講演されたものを筆録したものであります。